

【特別寄稿】

フランスの詩と音楽

放送大学名誉教授 柏倉康夫

1.

フランスの本屋には、著名な作家や詩人の作品を吹き込んだカセット・テープやCDを置いてあるコーナーが必ずといっていいほど設けられている。詩については、ジャン・ヴィラルールの朗誦するボードレールや、いまは亡きジェラルール・フィリップによるアラゴンやエリュアールの詩、ジャック・プレヴェールが自分自身で吹き込んだものなどがある。こうした朗誦のほかにも、作曲家が曲をつけた詩の数々、とりわけ19世紀末のフォーレ、ラヴェル、ドビュッシーの三巨匠による歌曲はベスト・セラーである。

こうした巨匠だけでなく、レオ・フェレやギイ・ベヤールといった現代の作曲家は、過去の名作に曲をつけ、あるいは自作の詩に作曲してそれを歌う。それが多くの愛好家を惹きつける。「詩に音楽の富を取り戻そう」と言ったのはヴェルレーヌだが、フランスに関する限り、詩と音楽の蜜月はいまだに過ぎ去ってはいない。

こうした詩と音楽の出会いのなかでも、「半獣神の午後」ほど幸運に恵まれた例はまれであった。ステファヌ・マラルメが書いた長編詩に、若い作曲家クロード・ドビュッシーが触発されて前奏曲をつくったあの「半獣神」の場合である。

いったいドビュッシーは、いつ、どんな切っ掛けからマラルメの知遇をえるようになったのかは定かではない。だが1891年には、マラルメが開くサロン「火曜会」に出席するようになっていた。「火曜会」とはその名前のお通り、毎週火曜日の夜に、パリ9区のローマ通りにあったマラルメの自宅で催された集まりで、新しい傾向の芸術家たちの結社として知られていた。「象徴派」の名のもとに、やがて文学史に登場することになる若い詩人や小説家の多くが、この会のメンバーであった。ヴィゼワ、ジュールダン、フォンテナス、モークレールといった常連に加えて、1891年には、新たにアンドレ・ジッド、ピエール・ルイス、ヴァレリーが加わった。当時29歳だったドビュッシーも、パイプを燻らしつつ、幾時間も暖炉のかたわらに立ったまま、文学、音楽、美術、はては新聞の三面記事を主題にして語り続けるマラルメの話に、耳を傾けたのであった。

ドビュッシーは音楽を創りはじめた当初から、マラルメの詩にひかれていた。パリ音楽院を卒業したドビュッシーは、1884年、カンタータ「放蕩息子」の作曲でローマ賞を受賞、新進作曲家として華々しいデビューを飾ったが、この同じ年、マラルメの初期の傑作「あ

らわれ」に曲をつけている。ただこの貴重な譜面は、長い間その存在さえしられなかった。

譜面が初めて公表されたのは、ドビュッシーの死後 8 年たった 1926 年のことである。「音楽雑誌」のドビュッシー特集号に掲載された譜面には、若き日の作曲家の手で、「ヴィル・ダブレー、1884 年 2 月 8 日」の書き込みがあり、出版者ヴェニエの夫人に捧げられている。

マラルメの長編詩「半獣神の午後」に、ドビュッシーがいつごろから関心をもち、それを音楽に移しかえようという野心を抱くようになったのか。1887 年、彼はパリ音楽院以来の親友であったポール・デュカスに、詩集「半獣神の午後」一冊を送っている。だが、15 年前わずか 195 部だけが限定出版された初版本は、当時すでにめったに手に入らない稀覯本であった。

灰色の日本奉書紙を用いた表紙には、純金押箔で L'APRES~MIDI / D'UN / FAVNE (半獣神の午後) と印刷されており、黒と鴉色の 2 本の絹の織り紐で綴じられている。本文は 12 ページ、エドゥアール・マネの木版刷り挿画 4 葉が添えられている。挿画のうちの 1 葉は、日本から取り寄せた美濃漉きの半紙の上に、黒とバラ色の 2 色で、葦のあいだに座った半獣神が水浴するニンフたちを覗いている図が描かれている。もう 1 枚の奉書紙の方には、蓮の絵が描かれ、その下に、朱で EX LIBRIS と刷られていて、マラルメの自筆で所蔵番号が赤のペンで書き込まれている。マネの挿画の残り 2 つは、詩の冒頭と末尾とに置かれていて、水浴する 3 人のニンフと葡萄の房を描いたものである。

ドビュッシーがデュカスに贈ったのは、1876 年に書肆アルフォンス・ドレンヌから出版されたこの豪華な初版ではなく、1887 年に出版された第 2 版、あるいは体裁は初版そのままに、型だけをやや小さくした第 3 版ではないかと推定される。この第 3 版は、同じ年にヴァニエ書房から出版されたもので、ドビュッシー自身もおそらくはこの再版によって「半獣神の午後」を読んだと考えられる。

12 音綴詩句 110 行にうたわれた斬新な詩情に、深く動かされたドビュッシーだったが、それを音楽に移しかえるのは容易な業ではなかった。ドビュッシーが仕事にかかったのは、それから 5 年がたった 1892 年のことである。

2.

『「半獣神の午後」への前奏曲』の創作については、時々着想を示す楽譜や友人宛の手紙が残されていて、進捗ぶりをたどることができる。デュカスに宛てたある書簡によれば、当初この曲は、『「半獣神の午後」のための前奏曲、間奏曲と敷衍曲』と名づけられていた。事実、ドビュッシーは 3 部からなる管弦楽曲を書くつもりであったが、そのうち前奏曲だけが独立して、ドビュッシーの頭のなかを占めるようになる。曲は 2 年後の 1894 年になって完成した。

出来上がった作品を聴いてもらうべく、ドビュッシーはマラルメに手紙を書いた。マラルメは当初、ドビュッシーが作曲をしていると聞かされて、歓迎しなかったと伝えられる。詩はそれ自体が音楽を内包しており、あえてそれに曲をつけることは不要だと考えていたのである。それでもマラルメは招待を受け入れて、ドビュッシーの家にやって来た。このときの模様をドビュッシーは、『マラルメ著作全集』の編者の一人、ジャン＝オーブリーに宛

てた手紙のなかで、こう回想している。

「この時代、私はロンドン通りの小さな家具付きアパートに住んでいた。・・・

マラルメは私の家にやって来た。運命を告げるような風采で、スコットランド風のマントを羽織っていた。音楽を聴いたあと、長い間黙っていた。そして、やおら私に言った。<私はこれほどのものを期待してはいなかった！ この音楽は私の詩の感情を深めている。そして、色彩を使ったよりもはるかに劇的な詩の書割になっている・・・>」

『「半獣神の午後」への前奏曲』の初演は、1894年の暮れもおしつまった12月22日、ギュスターヴ・ドレの指揮する国民音楽協会の演奏会で行われた。会場のサル・ダルクールには大勢の聴衆がつめかけた。そのなかにはマラルメの姿もあったと思われる。ドビュッシーは2日前、マラルメに招待状を送っていた。

「親愛なる師よ、

罰せられるべき高慢さから、あなたの半獣神の蘆笛が奏でたと私が信じ込んだ唐草模様〔の音楽〕を、ご来臨賜ることで勇気づけていただけますなら、私にとってどれほどの喜びか、あえて申し上げる必要はないと存じます。

クロード・ドビュッシー

初演の日に配られたプログラムで、ドビュッシーは、「〔この前奏曲は〕マラルメの美しい詩の大変気ままな挿画であって、詩を綜合しようとしたものではない。むしろこれは装飾の連続であり、半獣神の欲望と夢とが午後の暑さのなかをゆれ動いていく」と解説している。

後に「印象派音楽」の名前で呼ばれることになる新たな技法を生み出したこの傑作は、マラルメの詩の主題、灼熱のシチリアの岸辺にまどろみつつ、夢のなかで桃色に輝くニンフの肉体を捉えたと思う半獣神の官能と欲情のゆらめきを伝えて、余すところがない。

しかし新聞や雑誌の批評は散々であった。評論家のシャルル・ダルクールは、「フィガロ」紙上にこう書いた。

「切手遊びを究めることが、この若い音楽家の唯一の関心である。彼が専門とする材料については、たしかに手馴れてはいる。こうした作品は、作曲するのは面白いかも知れないが、聴くのはいっこうに愉快ではない。」

周囲のこうした悪評にもかかわらず、詩人は若い友人の作品に満足した。演奏会の夜か、あるいはその翌日に書かれたと思われる手紙の一節で、「あなたの『半獣神の午後』への挿画は、私のテキストに対して、繊細、厳密、豊饒をもって、郷愁と光輝のなかを、はるかに遠くにまで行っているとはいえ、何の不協和音もありません」と、マラルメは書いている。

マラルメの感謝の気持はこれだけに留まらなかった。かねてドビュッシーが1876年に刊行された豪華詩集をなんとか手に入れたいと望んでいるのを知っていたマラルメは、ある日、偶然手に入れた一冊に、ドビュッシーの名前を折り込んだ4行詩を書き添えて、贈ったのである。

「あなたが探すように言ってこられた『半獣神』ですが、手元に取り置きがなかったのです。ところが昨日、川の流れを眺めているうちに、突然そのことを思い出しました・・・」とあって、次のような4行詩が添えられていた。

森の精シルヴァンよ
お前の蘆笛がうまく鳴ったら
その蘆笛でドビュッシーが吹き鳴らす
光輝く音色に耳かたむけよ

マラルメとマネとドビュッシー、19世紀フランスの芸術を彩った3つの名前が書き込まれたこの1冊の詩集は、私たちの想像をかき立ててやまない。そして18年後には、そこにもう1つの名前が加わる。ロシアの天才舞踏家ニジンスキーが、マラルメの詩とドビュッシーの音楽から、バレエ「半獣神の午後」を創るのである。

詩人の夢想がつむぎだした詩句は、パリ・オペラ座の舞台の上で、ニジンスキーの肉体を得て、半獣神の夢を空中に立ち昇らせたのであった。